

学位請求論文審査報告要旨

2019年11月13日

申請者 霍 沁宇

論文題目 日本語教育の対話型授業における学習者の姿勢の変容

論文審査委員 石黒 圭
西谷 まり
金 孝卿

1. 本論文の内容と構成

高等教育機関で行われている日本語教育の研究において、研究成果の発信を担っているのは、教壇に立つ日本語教員であることが多い。そのため、日本語教育研究は、教授知識や教授理論、授業シラバスや教室運営といった教える側からの視点で行われることが多い。しかしながら、そうした視点からは、教わる側、すなわち学習者の立場や心理が抜け落ちてしまいがちである。

本論文は、日本語教育のピア・ラーニングの授業に参加した学習者への詳細なインタビューをとおして、学習者一人ひとりがどのような学習姿勢で授業に参加し、そのなかでその学習姿勢を変容させていったのか、対話という観点から丁寧に追跡したものである。

本論文は、全10章からなる。その構成は以下の通りである。

目次

第一部 はじめに

第1章 研究背景

1. 問題提起

2. 研究目的

第2章 先行研究

1. 日本語教育をめぐって

2. 対話をめぐって

2.1 対話とは

2.2 対話と社会

2.3 対話型授業

3. 学習者の学びをめぐって

3.1 学術コミュニティにおける学習者の学び

3.2 作文授業における学習者の学び

3.3 読解授業における学習者の学び

3.4 総合的日本語授業における学習者の学び

第二部 対話型読解授業

第3章 対話型読解授業の概要

1. テキストの内容
2. 授業活動
3. 授業項目
4. 学習者

第4章 学習者全体の姿勢の変容

1. 学習者全体の姿勢の調査方法
 - 1.1 データの収集
 - 1.2 データの分析
2. 学習者全体の姿勢の分析結果
 - 2.1 簡略図
 - 2.2 これまでの読む姿勢
 - 2.3 努力と葛藤
 - 2.4 気づきと学び
 - 2.5 成長の加速
 - 2.6 読む姿勢の変容
 - 2.7 完成図
3. 学習者全体の姿勢のまとめ

第5章 2名の学習者の姿勢の変容

1. 2名の学習者の姿勢の調査方法
 - 1.1 データの収集
 - 1.2 データの分析
2. 2名の学習者の姿勢の分析結果
 - 2.1 Fさんの姿勢の変容
 - 2.2 Rさんの姿勢の変容
3. 2名の学習者の姿勢のまとめ

第6章 ピア・ラーニングの盲点

1. ピア・ラーニングの盲点の調査方法
 - 1.1 調査1ー学習者の姿勢
 - 1.2 調査2ー教師の工夫
2. ピア・ラーニングの盲点の分析結果1ー学習者の姿勢
 - 2.1 意識の変容
 - 2.2 学習の実態

3. ピア・ラーニングの盲点の分析結果 2—教師の工夫

3.1 授業の設計と運営

3.2 教師の心境変化

4. ピア・ラーニングの盲点のまとめ

4.1 盲点の所在

4.2 日本語教育への提言

第三部 対話型作文授業

第7章 対話型作文授業の概要

1. 授業内容

2. 学習者

第8章 学習者全体の姿勢の変容

1. 学習者全体の姿勢の調査方法

1.1 データの収集

1.2 データの分析

2. 学習者全体の姿勢の分析結果

2.1 混沌とした状態

2.2 未知なる領域における暗中模索

2.3 気づかなかった一面の浮上

2.4 「私の研究観」の成立

3. 学習者全体の姿勢のまとめ

第9章 女性学習者の葛藤と成長

1. 女性学習者の葛藤と成長の調査方法

2. 女性学習者の葛藤と成長の分析結果

2.1 未知なる領域への船出

2.2 右往左往

2.3 歩み寄るための戦い

2.4 今を支えている、過去の「私」

2.5 雨上がりの晴れ空

3. 女性学習者の葛藤と成長のまとめ

第10章 本研究のまとめ

おわりに

資料

参考文献

2. 本論文の概要

本論文は、ピア・ラーニングという日本語教育の対話型授業における学習者の学びの姿勢の変容をテーマに研究を進めたものである。

第一部では、本論文の前提について論じている。第1章では本論文執筆の個人的背景を述べた上で、次の三つの研究課題を設定している。

1. 対話とはどのようなもので、どのような意義があるか。
2. 日本語学習者にはどのような対話力が必要か。
3. 対話力が育つ日本語教育とはどのようなものか。

第2章では、本論文に関連する先行研究を、日本語教育に関わるもの、対話に関わるもの、学習者の学びに関わるものの三つに分けて整理、概観している。

第二部では、都内の大学において2014年に行われた対話型読解授業を、第三部では都内の大学において2015年に行われた対話型作文授業をそれぞれ調査した結果を分析、考察している。

第二部の第3章では、調査対象となる対話型読解授業の概要を、テキストの内容、授業活動、授業項目、学習者の4点にまとめ、紹介している。続く第4章では、対話型読解授業に参加した学習者全体の学びの変容を、M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を用いた分析で明らかにしている。授業に参加した上級学習者はこれまでの【自分の読み方への固執】をしていたが、授業において【戸惑いと悩み】を感じ、そこで【努力と工夫】をしていた。努力していても問題が解決されず、【妥協とあきらめ】に陥ったこともあるが、【気づきと学び】を多く得ていた。それがきっかけで、また【授業スタイルの変化による相互作用の活性化】と【教室内外の活用及び達成感】を通して、読む姿勢が【より深く、より広く】変容している様子が明らかになったとする。今後の教育において、教師による①明確な指示、②対話秩序の管理、③多様性への尊重、④ポートフォリオ活用法の指導、⑤成長段階を意識した支援、に関する5点の提案をしている。

第5章では、対話型読解授業に参加した2名の学習者、FさんとRさんの学びの変容を、SCAT（Steps for Coding and Theorization）を用いた分析で明らかにしている。二人はこれまでの学習経験や教育背景の下で、文章を正確に、批判的に読む力を授業開始時にすでに備えており、多くの学習者は自己主張への不安があったが、二人にはそうした不安がなく、他者との対話において積極的に意見を発信していたという。また、多くの学習者は「正解」を求める傾向が強いのにに対し、二人は考え方の斬新さや多様性を追及していたことも分かった。一方、二人には違いも見られた。Fさんの場合は、〈理解度への過剰な不安〉があり、変容を積極的に受け入れ、マイペースな読み方からより柔軟でバランスのよい読み方に変ったことが明らかになった。Rさんの場合は、〈自分の読みへの信頼〉を持ち、授業を通じて読み方自体にはあまり変容が見られなかったが、他者との交流の中で視野が広がったことが分かった。今後の教育において、教師は個々人の学習者に目を向ける必要があり、FさんとRさんのような、上級レベルの中でも日本語力の高い学習

者のニーズに対応するために、上級のさらなるレベル分けを検討することが望まれるとしている。

第6章では、学習姿勢があまり前向きではないと教師に評価されていた学習者Dさんに注目し、Dさんに対するインタビューデータおよび授業内対話、ワークシートのデータを分析している。その結果、Dさんは授業の最初のころ、日本語学習歴の浅さや慣れないピア・リーディング授業のため、課題の意図がピンとこなかったり、批判的に読むことに不安を感じたり、悩みを抱えていたが、他者との対話の中で多様な考え方に気づくことで批判的意識が芽生え、積極的に自分の意見を発信するようになった。同時に、他者への配慮も持ち、クラスメイトと前向きに案を検討しており、途中で仲間の中で少数派になった場合もあるが、他者を説得することに努めていた。そして、授業を通して、読む姿勢がより能動的、より柔軟に変容していったことが分かったという。研究結果より、対話型授業において、直接対話の欠如によって生じる、教師に気づかれにくい学習者一人ひとりの学びの実態や、その届かない声を「ピア・ラーニングの盲点」と名付け、今後の教育においては、教師は盲点が生じる可能性を意識し、個としての学習者に向き合う努力をする必要があるとしている。また、学習者の本来の読み方や、授業活動の中での変容に目を向け、個々人が必要とするフィードバックを与えることに力を入れることが求められ、同時に、教師自身の考え方も含め、教室内における多様な文化的背景と価値観を尊重した上で、学習者に対する合理的かつ明確な評価基準の作成、公開、及びそれに準じて慎重に評価する取り組みが必要となると主張している。

一方、第三部となる第7章では、調査対象となる作文型読解授業の概要を、授業内容、学習者の2点にまとめ、紹介している。続く第8章では、対話型作文授業における学習者全体の学びの変容を、M-GTAを用いた分析で明らかにしている。そこでわかったことは次の通りである。日本語上級学習者は、【混沌とした状態】から授業に入り、【日本語が不安の源】であり、【研究プロセスの体験】をし始めた。対話を用いた研究実践の授業を通して、まず、【未知の領域における暗中模索】段階に入った。そこでの【モチベーションの低下】、【一人での模索】、また、【話し合いに意欲的に臨む】ことにより、【交流で生まれた葛藤】も見られ、【他者から学ぶ、自己を知る】ようになった。その後、【研究対象への気づき】、【文章執筆の技法への気づき】、また、【研究姿勢への気づき】が得られ、【気づかなかった一面の浮上】にたどり着くことができた。最終的に〈私のやり方、私の個性〉、〈人のために研究する〉ことを重視するようになり、また、他者との話し合いで〈和して同ぜず〉という姿勢を持ち、〈いつでも、どこでも〉研究を考えるようになり、【「私の研究観」の成立】に到達したとしている。なお、今後の教育に対して、①枠組みとリソースの提供、②仲間と対話する意義と方法の伝授、③学ぶ姿勢で向き合う、という三点の提案をしている。

第9章では、対話型作文授業に参加した中国人女性学習者Qさんの葛藤と成長をテーマに研究を進めている。具体的には、Qさんに対するインタビューデータ、授業内対話の録

音データや成果物などを収集し、SCAT を用いてストーリーを再現させている。授業において、Qさんは【研究という孤独な旅】を味わいながら【対話への葛藤・格闘】をし、【異なる方角・多彩な風景】が現れ、【日々の試練は成長の機会】と捉えるようになった姿が見えてきた。また、彼女を支えているのは、母国での【厳格な教育背景】によって鍛えられた【私の学習姿勢】であること、さらに、研究力を磨く中で【自信の確立】と【予想外の「恋」の展開】に至ることと、【人間に役立ち、独創性のある修論】を目標とするQさんの姿勢も明らかになったとしている。

以上、一連の考察より、冒頭の三つの問いに対する回答を下記のようにまとめている。

1. 対話とは、人間同士が向き合って話をするることである。対話を通して、意見の整理ができ、新たな知見の誕生や信頼関係の構築も期待できる。さらに、自己、他者に対する理解が深まり、考え方がより多角的に変容していくことも考えられる。なお、不安、不満、尊敬、感謝、愛着、期待、苦悩など、人間の感情は対話に伴って生じ、変化する場合も多々ある。
2. 多様な価値観が共存する環境に置かれることの多い日本語学習者は、人間同士の対等を基に、自己、他者を尊重した上で意見を述べること、また、他人の意見に対して建設的な提案をすることが望まれる。
3. 日本語教師は、学習者の背景、個性を尊重し、彼らが安心して自由に発信できる環境を保障することが重要である。また、学習者同士の対話を見守り、話し合いが順調に進むように、適宜な調整や介入が必要である。そして、個々の学習者の意見に対して、知識の補充や観点の提供など、より深みのあるフィードバックをすることが求められる。

3. 本論文の成果と問題点

本論文は、都内の大学のなかで行われたピア・リーディングとピア・レスポンス、二つのピア・ラーニングの授業に参加した留学生を対象に、半年間の授業の開始時、中間時、終了時、さらには必要に応じてその後も丁寧なインタビューを重ね、対話型授業に参加したことによって日本語学習者の学びの姿勢にどのような変容があったのかを明らかにした労作である。その成果は、大きくは次の3点にまとめられる。

第一の成果は、M-GTAを用いた分析により、こうした対話型授業に参加した学習者がどのように壁にぶつかって迷いまた悩み、努力や工夫を重ねて気づきが芽生え、それをきっかけに壁を乗り越えて自分なりの学習観を確立し、安定した学びを続けていくのか、その変遷が明らかにされている点である。M-GTAは、教育などのヒューマン・サービス領域において、現象の変容プロセスを明らかにするのに向いた分析であるが、本論文はそうしたM-GTAの特徴を生かした優れた分析となっている。本論文では、クラスに所属する学習者の全体的な傾向を分析するためにM-GTAが用いられているが、学習者の成長を描いたストーリーラインにとくに説得力があり、筆者の分析力の高さが窺われる。

第二の成果は、SCATを用いた分析により、クラス全体の傾向とは異なる個々の学習者の心理的な変容が明らかにされている点である。SCATは少人数を対象にした分析に向く分析法であるが、本論文では特徴的な学習者数名に焦点を当て、全体的傾向の分析では見えてこなかったそれぞれの学習者の個性をあぶりだすことに成功している。また、学習者のインタビューが説明のなかに適切に引用されており、M-GTAによるクラス全体のマクロな変容の傾向、SCATによる個々の学習者の変容のミクロな傾向の二面が、学習者の生の声とともに提示されることで、対話型授業に参加する学習者の変容が、目に浮かぶように鮮明に描かれている。

第三の成果は、徹底して学習者の立場に立つことで、教師の目からは捉えきれない学習者の学びの姿勢の変容が明らかにされている点である。とりわけ、第6章の「ピア・ラーニングの盲点」において的確に指摘されているように、対話型授業では、学習者どうしのグループ・ディスカッションが中心になるために、教師の目からは学習者が学ぶ姿が見えにくくなってしまおうという構造的な問題を明らかにした点は評価できる。また、日本語教師は、学習者の使う日本語に注目してしまいがちであるが、本論文は人間として学習者の心理に注目し、丁寧に分析している点で、日本語教師が学習者とどのように向かい合うべきか、再考するさいの示唆に富んだ論考であり、その背景には、徹底して学習者の視点に立ち、学習者の立場に身を置いてみるという方法論上の一貫性がある。

一方で、こうした優れた諸点を備えた本論文にも、問題点が存在する。

第一は、個別的な分析で選ばれた分析対象の選定基準である。今回、SCATの対象として選ばれた個別的な分析の対象者は何らかの面で特徴的な学習者であり、その意味で特殊事例であると言える。もちろん、M-GTAで全体的な傾向を見ているので、特殊事例に光を当てる理由はよくわかるが、SCATを用いた個別的な分析でも、比較の基準となる平均事例を取り出して仔細に分析することで、それぞれの特殊事例の持つ特殊性がよりくっきりと見えてきた可能性もあろう。

第二は、本論文のなかで、日本語力のきわめて高い学習者を対象に、もっと上のレベルを設定してクラスを分けたほうがよいという提言である。たしかにそれは学習者の声から導かれた提言であり、クラス運営上、そうしたほうが望ましい場合もあるが、日本語力のきわめて高い学生も同じクラスのなかに入れ、助け合ったり切磋琢磨したりするほうが対話型授業の良さを引き出せる面もあり、そのほうが本論文の主旨にも適合したように思われる。

第三は、第9章に現れる女性という観点の強調である。女性という観点は学習者Qのインタビューから感じられた一つの重要な切り口であろうが、その点を強調したことで論文としてのまとまりを欠いたきらいがある。女性という観点を、本論文全体の主張の中にあえて組み入れず、別の研究として新たに出発する方法もあったように思われる。

しかし、これらの問題点は、本論文の達成した高い学術的成果を損なうものではない。また、こうした問題点については、著者にも十分な自覚が見られ、今後の研究のなかでのさらなる考察の深まりが期待されるところである。

4. 結論

以上より、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考ええる。

最終審査結果の要旨

論文審査委員 石黒 圭
西谷 まり
金 孝卿

2019年10月25日、学位請求論文提出者、霍沁宇氏の論文「日本語教育の対話型授業における学習者の姿勢の変容」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、霍沁宇氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、霍沁宇氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。